



# 日本レイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信 No.79

日本レイ・アームストロング協会 (ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF) 2013年12月発行  
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 Tel.047-351-4464 FAX047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp

ホームページ <http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf/>  
発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫



## 外山夫妻の41年ぶりのLONDON “センチメンタル・ジャーニー”

### 英バリー・マーチン楽団当時の仲間らと鮮烈ジャムセッション！

“あの日々”が甦り、WJFの“いま”に至った源流を辿って…

サッチモ祭も無事に終え、ゆっくり休む間もなく外山喜雄・恵子夫妻は10月15日、英ロンドンへ向かった。外山夫妻がニューオリンズに滞在中の1971年、夫妻は当時同地にきていた英のバリー・マーチン(ds)楽団のメンバーとなり、ニューオリンズを後にして1年間、全欧州とアメリカを演奏旅行した。このことはあまり語られていない。マーチン氏は1972年アメリカに移住、現在はニューオリンズ在住。外山夫妻の今回の旅は、英国に住む当時のジャズ仲間と会い、彼らのバンドにゲスト出演するためだった。「今回のイギリス訪問はまさに41年ぶりの“センチメンタル・ジャーニー”でした。71年当時、バリーのバンドメンバーとして9月から翌72年の5月まで欧州各国を廻りました！しかも9月まで、バンドと一緒にアメリカ大陸をひと回りしたのです。その思い出が、懐かしく呼び起こされました」と外山夫妻。これまでは主にニューオリンズでの夫妻にスポットが当てられがちだった。そこで今回はかつてヨーロッパへ飛び、全米をも廻ったさいの夫妻の秘められた航跡を追った。まるで現在の外山夫妻とWJFの活動に連なる源流を辿るようだった。

(小泉良夫)



写真上はニューオリンズからルイス・ネルソンをゲストに迎えてのツアー。(前列左から)ジョン・デフリー(cl)、ルイス・ネルソン(tb)、外山喜雄、恵子夫妻、バリー・マーチン(ds)=1972年3月12日、英ケンブリッジで。恵子さんのバンジョーケースは、当時ニューオリンズ在住中のジャズ史研究者、ビル・ラッセルが譲り受けたばかりのローレンス・マレロのバンジョーにぴったりのもので探し出してくれたという。そこに恵子さんがミニーマウスをペタッ！ 写真左はサミー・レムントンとのセッション=今年10月20日、英ケント州チルハムで

## みんなニューオリンズ・スタイル一筋

10月15日から22日までの外山夫妻の英国旅行は、ロンドン、ベリーランドホテルでのブライアン・ホワイト(cl)の

マグナ・ジャズバンドとの共演。そして同市の南東に



あるケント州の歴史的な街、チルハムのビレッジホールで

のサミー・レミントン(cl,as,fl)バンドとの2公演だけだったが、いずれもニューオリンズ・スタイル一筋、それをしっかり守り続けているバンドだけに、外山夫妻ともぴったり意気が合う(写真上)。

42年前、半年間暮らしたロンドン。外山夫妻は、イギリスのドラマー、バリー・マーチン楽団にスカウトされた当時からこう振り返る。

「そう、あれは1971年のこと。ニューオリンズに来ていたバリー・マーチンが、私たちの演奏をすっかり気に入ってしまい、彼のバンドに入ってイギリスに来

ないかって。ヨーロッパとアメリカをツアーするんだと、持ちかけられたのです。ちょうど彼のバンドのトランペッターがそのツアーの後、退団することになっていたのです」と、外山さんの心もヨーロッパに飛んでいった。

## バリー・マーチン・バンドに入団し欧州へ

バリー・マーチンは、1961年に初めてニューオリンズを訪れ、ジョージ・ルイス他多くのジャズメンをヨーロッパへ招き活躍していた。このバンドで半年間、ロンドンを基地にヨーロッパ各国を演奏して廻った体験は、夫妻とWJFの後の活躍の源泉となったのだ。マーチン氏は1972年アメリカに移住、現在はニューオリンズに住み、数年前までG

HBレコードのプロデューサーとして有名なアメリカン・ミュージックレコード(通称AM)のリイシュー等にかかわった。外山さんは、この恩人バリーを、トロンボーンの前衛・ロンズとのコンビで2回も日本に招聘している。

## 昔なじみのジェフ・コールとも再会果たす

今回再会した当時のバンド仲間、ジェフ・コール(tb)などは髪の毛も立派なひげも真っ白になっていたが、外山さん宅で見せていただいた昔の写真は、外山さんともども黒髪ふさふさ(下の写真を比べてみて下さい!)。ジョージ・ルイス・スタイルの世界的クラリネット奏者、サミー・レミントンもニューオリンズ一筋のジョージ・ルイス・スタイルそのもの。



左からジェフ・コール(tb)、デブ・ベネット(ジャズ研究家)、外山さん、アン・ベネット夫人

浅草おかみさん会の招きで最初のニューオリンズ・フェスティバルにもやってきている。そんなメンバーと一緒にいるから、外山夫妻はつつい昔を思い出してしまったのだろう。

「昔は、ジャズ一筋。お金がなかったのと、観光なんかに興味があ



(写真左)左からワイルド・ビル・デビンソン(cor)、クライド・バーンハート(tb)、外山喜雄さん、ジェフ・コール(tb)、JC ヒギンボサム(tb)=NYで(写真右)左から恵子さん、喜雄さん、バーニー・ピガード(cl)、ジョン・デフリー(cl)=ロサンゼルスで

なかったもので、ロンドンでは何にも見ていなかったし、何にも知らなかったのです。バリーが車で迎えに来てくれて出掛けていく毎日。でも、今回はロンドンに5泊もできたので、いろいろ見て回りました。ミュージカルの『ライオンキング』とかも、楽しむこと

ができました。ビターも飲みましたよ。昔は気づかなかったのですが、ウエストミンスター寺院、ロンドンブリッジ、ビッグ・ベン…イギリスってほんとステキ、素晴らしい国なのですねえ」と大感激の恵子さん。

1971年に話を戻すと、夫妻はこの年の9月、ミネアポリ

スでマーチン・バンドと合流しイギリスへ。ロンドンを基地にヨーロッパ・ツアーを始める。夫妻はリッチモンドにあった昔ながらの大きな住宅の地下を借りて落ち着くことになる。そこへバリーが車で迎えに来てツアーに出掛ける日々(写真左)。



バリーの運転するミニバスで、左からアルトン・パーネル(p)、バリー、恵子さん

## 暗い、寒い、お金も、暇もない生活…

当時は“イギリス病”などと言われロンドン是不景気のまっただ中。1日に3回も停電があって寒くて！電気料金が安い夜間に、暖房用に煉瓦のようなものを暖めておく電気ストーブが流行っていたのを思い出します」と、思いもよらない苦労話が始まる。

そんな不況のなかでも、パブでの演奏は超満員になった。

「私たちがいま、いつも演奏しているHUBのような所でした。どこも



左からアルバート・ニコラス(cl)、アルトン・パーネル(cl)、ジョン・デフューリー(cl)、外山恵子、バリー・マーチン(ds)=スイスで

た。まさにサッチモのヨーロッパ・ツアーを彷彿させる。

季節は冬に向かっていった。「寒い、暗い(特にイギリス)、お金がない、コンサート続きで暇もない…そんな連続の毎日でした。観光なんかとても出来ません。で、寒いといってもオーバーなど買うお金もないし、たとえ買ったとしても、あの暑いニューオリンズに帰ったら使い道なんてないでしょ。そこで薄いダスターコートのようなもの裏に毛布を縫い込んで歩き回

っていました。『ちょっとみっともねえよ』なんて言われたこともありましたよ(笑い)。そんな生活が半年以上も続いた。

それでも欧米ツアーを通じて外山夫妻と共演したり、出会ったりしたミュージシャンは数知れない。恵子さんがアルバムから1枚の写真を撮りだして、「ねえ、この方、バーニー・ビガード(cl=まさにサッチモ・オールスターズのスーパースター)よ」



恵子さんとバーニー・ビガード

とさりげなく言う恵子さん。恵子さんの肩に手を回して抱きしめるようなツーショット(写真左)。そんな写真が次々と披露されるからインタビューなんか進むわけがない。

## 映像コレクターとの運命的な出会い

イギリスではこんな素晴らしい出会いもあった。

「イギリスって大英博物館でも分かるように蒐集とか、いろいろ細かい研究とか、凄いいじゃないですか。切手の蒐集とかもそうですよね。そんななかにバリーの友達でジャズ研究家がいたん



イギリスでは BBC 放送にも出演。アルトン・パーネル(p) クリス・バーバー(tb)らと外山夫妻=1972年1月3日

超満員。みんな立ち見です。その片隅のステージで演奏するのです。ビートルズやローリングストーンズが出てきた後だったのですが、当時はみんなまだ“トラッドジャズ”が大好きだったんです。それでニューオリンズ系のバンドがいっぱいあった。そんななかで日本人が2人も加わっているバンドというのは、かなり宣伝にもなったのでしょ。でもねえ、そのようなパブでやっても、当時としては1000円にもならない。そこでみんなヨーロッパ大陸へ出稼ぎに行っていたんです。イギリスと違ってヨーロッパ大陸はととも景気が良かったんです」

翌年5月までバリー・バンドとともに夫妻が廻った国々は、英国を始めアイルランド、スコット

ランド、ベルギー、オランダ、ドイツ、デンマーク、スウェーデン、スイス、イタリア…もちろんフランスもしばしば通過し

です。デイブ・ベネットご夫妻(前ページに写真)。ロンドンでライブハウスもやっていたこともあって、アメリカのミュージ

シャンも呼んでいました。なかでも、彼の知人のジャズ映画収集家の家を見た映像には驚かされました。その時初めて若い頃のルイ・アームストロングとか、ベッシー・スミス、デューク・エリントンも1929年の映像。2人でびっくりして感激して泣き出してしまいました」と。

### 「ヨシオ！一緒に映画をコピーしない？」

博物学というか、あちらは凄い。そういえば、外山さんの詳細を極めたディスコグラフィーを書きとめたのもイギリス人、レイモンド・リーさんだ。

「で、ベネットさんが『映画を蒐集するんだけど、いるんだったらヨシオ、一緒にコピーする？』って。私たちも、ジャズが好きなんだとわかってくれて、ずいぶん可愛がってくれました」。それが外山さんの映像コレクターとしての出発点にもなった。日本に帰って、1975年頃から、その映像が外山さんのWJF活動のなかでも大活躍する。

「日本へ帰ってから、彼が貴重なジャズ・フィルムを送ってくれて、。始めは映写機がなくて、虫眼鏡でフィルムのコマを透かして見ていましたヨ。その後、やっとCFディレクターでジャズファン、ギターも弾く田部雅美さんが古い映写機をくださった！ニューオリンズばかりでなく、私たちは、イギリスにもずいぶんとお世話になっているんです」と外山夫妻。またまた古い写真が次々と持ち出される。おまけに恵子さんが当時つけていた日記（細かい字、英語混じりでびっしり書き込まれている！）まで出てきて…これはもう会報どころか、本が1冊できてしまう。

### 夢のようなミュージシャンとの出会い

この間のツアーでは、次々とニューオリンズからのミュージシャンもゲストで加わった。「もう夢見たいなミュージシャン。モダンジャズで言えば、マイルス・デイヴィスがゲストに入った感じ。

ずいぶんいろんな方々に会いましたね。アルトン・パーネル(p)、ルイス・ネルソン(tb)、クリス・バーマー(tb)…バリー・マーチン(ds)にはリーダーのやり方まで学ばせてもらいました。

バンドがアメリカからゲストを招くなんていうことは日本ではまだ誰もやっていなかった。それも私は真似してしまいま



エド・ガーランド(b)と恵子さん＝ロサンゼルスで



左からジョン・デフリー(cl)、アルトン・パーネル(p)、ジョン・マルクス(p)、恵子さん＝デンマークで

した」と外山さん。  
「文末に外山夫妻のそうそうたる人脈をご紹介」  
ルイス・ネルソンは初代のニューオリンズ・オールスターズのメンバーで、1963年には、ジョージ・ルイスの日本ツアーでも来日している。  
「それにいろいろな国の人の前で演奏するっていうのも、大変な経験でした。メンバーは入れ替わってはいますが、日本人がいて、イギリス人がいて、スウェーデン、デンマークの方もいました。オーストラリアも、アメリカも、本当に国際的なバンドでしたね。そういう人たちが初めて会っても、ニューオリンズ・スタイルでさっとできちゃう。アームストロングと同世代の伝説的なミュージシャンと共演することもありました」と外山夫妻。

「イギリスにいたときロック系のバンドと演奏したこともあります。名前は覚えていませんが、いまでは凄いミュージシャンになっていたりして…」



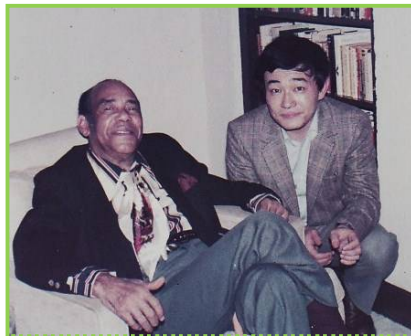
NYでのジャムセッション。左からジョン・デフリー(cl)、バリー・マーチン(ds)、外山さん、クライド・バーンハイト(tb)、トミー・ベンフォード(ds)、ジェフ・コール(tb)、J・C・ヒギンボサム(tb)

### 霧のロンドン、高速道路ぶっ飛ばし…

「そうそう、イギリスは霧が多いでしょ。ツアーから帰ってきて車で高速道路を走るんですが、前もよく見えないのにみんな慣れてるからビュンビュン飛ばす。のろのろ走っていると怒られちゃう。翌日の新聞を見るといつも事故の

記事で、車が山になっているほどです。仲間のミュージシャンたちも半分は後年そんな事故を起こし、致命的な大けがをしているんですよ」

「イタリアから帰ってくる時、アルプスを越えるのに汽車に車を積んでアルプスの下のトンネルを抜けるんですが、その汽車に乗り遅れてしまったことがありました。次は翌日になってしまう。仕方なくこのまま行ってしまうよ…となったんです。みんな一緒。山に入って行くと積雪がだんだん高くなって行って、とうとう背丈より高い壁になってしまった。その壁がなくなると今度は道がない。アルプスのてっぺん！ それに彼ら酔っ払って運転するし、怖かったなあ。」



伝説のドラマー、スティー・シングルトンと=1971年、ニューヨークで

### 雪の壁を抜けて車でアルプス越え

映画『サッチモは世界を廻る』のオープニング「西暦紀元前218年、カルタゴの将軍は37頭の象と12,000頭の騎馬を率いてアルプスを越えた。ルイ・アームストロングは20世紀半ば、トランペットを抱え、5人の演奏家を率いて同じアルプスを越えたのである」

…そんな場面を彷彿させるが、外山夫妻は雪の中を仲間たちと一緒に車でアルプスを超えた。まるで映画を見ているようだ。ずっとニューオーリンズにいた



アメリカツアーでは、こんな風にしょっちゅうレッカー車のお世話になった  
=ユタ州で

のではなく、こうして外に出掛けていったことも、夫妻には貴重な“財産”になっている。

欧州を離れるころ季節は初夏に向かっていった。「5月でしょう。新緑…イギリスはもう緑が凄くきれいでしたねえ。そんな時にアメリカに帰って行って、今度はアメリカ中を一周する旅が始まるんです」

「ヨーロッパに発つ前に1ヵ月ほどニューハンプシャーなど周辺を廻りましたが、今度帰ってきた後は、ニューヨークから始まって(時計と逆回りで)、NY→ニューハンプシャー→ボストン→マジソン→ラスベガスを抜けてサンフランシスコ→ロサンゼルス→フェニックス→ダラス→ニューオーリンズ→ジョージアなどを経てボストンへ。ボストンでは1ヵ月ぐらいぶらぶらしていました」

### おんぼろ車で故障続きのアメリカ一周

アメリカの砂漠の暑さも大変。おんぼろ車にみんなが一緒に乗って、ドラムやベースは屋根の上。暑くてオーバーヒートするなど故障続き。その都度、1人が隣町までヒッチハイクしてレッカー車を連れてくる(写真下)。恵子さん、「待っている間にトイレに行きたくなって…草むらでそっと…」。

いやはや、アメリカでも苦勞の連続。ふっと映画『グレン・ミラー物語』の車でのツアー場面を思い出した。サッチモ、グレン・ミラー、レッド・ニコルス、外山夫妻…ジャズ・ミュージシャンがツアーにかける情熱には舌を巻く。

このツアーを終えて夫妻がニューオーリンズに戻ったのは、出発して1年後の72年9月だった。

今回は、会報のページ数にも限りがあって、この程度で止めさせていただきますが、アメリカ1周のツアーも、何か別に本1冊になりそうですね。

このヨーロッパ、アメリカツアー等で外山夫妻が共演したり、会うことが出来たりした主な有名ジャズ・ミュージシャンを以下、列挙していただいた。

エド・ガーランド(b)、ヘイズ・アルヴィス(b)、バーニー・ビガード(cl)、アルバート・ニコラス(cl)、ボブ・ヘルム(cl)、ジョージ・プロバート(Ssax)、フロイド・ターナム(Tsax)、ワイルド・ビル・デビンソン(cor)、テディー・バックナー(tp)、アンドリュー・ブレイクニー(tp)、ロイ・エルドリッジ(tp)、マックス・カミンスキー(cor)、ケン・コリヤー(cor)、パット・ハルコックス(tp)、ユービー・ブレイク(p)、アール・ハインズ(p)、クロード・ホプキンス(p)、アルトン・パーネル(p)、キッド・オリー(tb)、ルイス・ネルソン(tb)、ウォード・キンボール(tb)、ターク・マーフィー(tb)、トラミー・ヤング(tb)、クリス・バーバー(tb)、マックス・コリー(tb)、プレストン・ジャクソン(tb)、クライド・バーンハイト(tb)、J・C・ヒギンボサム(tb)、エイブ・リンカーン(tb)、ボブ・ミルキー(tb)、ナッピー・ラメアー(g)、クランシー・ヘイズ(bj)、エディー・コンドン(g)、スティーブ・ジョーダン(g)、ベン・ポラック(ds)、トミー・ベンフォード(ds)、ズティー・シングルトン(ds)、ワールズ・グレーテスト・ジャズバンド、ファイヤーハス5プラスツアー…。(おわり)

今年10月13日、NY州ロングアイランドの自宅で逝去、享年91歳

ジェリー・ロール・モートンの再来ボブ・グリーンに捧げて

合掌!

東日本大震災被災地とニューオリンズの絆——50年の友情が生んだ素敵な出来事 (外山喜雄)

ニューオリンズ・ジャズのパイオニア、ジェリー・ロール・モートンの再来と呼ばれた名ピアニスト、ボブ・グリーン (Bob Greene) さんが10月13日、肺がんのためNY州アマガンセット (ロングアイランドの北東) の自宅で亡くなった。91歳だった。



ジョージ・ルイス楽団が初めて労音公演で来日した1963年、ジョージの大ファンだったボブは、この日本公演に興味を持ち、初めて日本にやってきた。以来私たちや、ニューオリンズ・ラスカルズの皆さんとボブとの50年にわたる長い交流が始まった。



ミルト・ヒントン等が入ったボブのジェリー・バンド=RCAレコード

1968年から73年、私達のニューオリンズ武者修行時代、彼はニューオリンズによくやってきた。キッド・トーマスやジョー・ワトキンス等とのプリザベーション・ホールでのセッション等素敵な思い出がいっぱいだ。

彼の招きで出演した1968年のマナサスジャズ祭は、出演ライブ盤が私たちの初レコードとなった。



ジェリー・ロール・モートン・レッド・ホット・ペッパーズ=1926年

1971年、ボブが、真剣な顔で私にお願いがあるとやってきた。私は学生時代からジャズのレコードを聴いて音を譜面に書くことができたのだが、そのことを知って、ジェリー・ロール・モートン再現バンドをスタートさせたいので、譜面を書いてくれないかという依頼だった。お安い御用と彼のために書いた譜面が、1920年代のジェリー・ロール・モートン・レッド・ホット・ペッパーズの名曲の数々。この編曲を使い、ミルト・ヒントン (b)、ハーブ・ホール (cl=エド・ホールの

弟)、トミー・ベンフォード (ジェリー楽団のドラマー) 等々そうそうたるメンバーの入ったボブ・グリーンバンドが、1973年のニューポートジャズ祭に出演し、リンカーンセンターで演奏、翌74年の同コンサートは『ボブ・グリーンとジェリー・ロール・モートンの世界』としてRCAビクターからライブ盤のレコードが発売され、全米、そして南米のツアーも実現した。2003年頃、ウイントン・マルサリスが同センターでジェリーの音楽を取り上げ、注目を浴びる30年も以前の話だ。私はそのお役にたったことを大変誇りに思っている。

ボブの活躍は、有名な映画監督の目にもとまる。ジャズファンとして知られ、名画『死刑台のエレベーター』でマイルス・デイビスを使い脚光を浴びた映画監督ルイ・マルだった。彼は、ニューオリンズの



ボブから返送されてきた外山さん手書きオリジナル譜

红灯街ストーリービルを舞台にした映画を

作る構想を持っていたのだ。ニューオリンズの红灯街ストーリービルの娼婦たちを取り続ける写真家アーネスト・J・ベロック (実在の人物) と少女娼婦の愛の物語『プリティ・ベビー』(写真下の左=1978年、米パラマウント映画)。映画化のきっかけはニューオリンズで発見された1910年ごろの多数の写真乾板。A4サイズほどのガラス盤に液材を塗ったネガには、ベロックが撮影したストーリービルの娼婦たちのポートレートが写っていて、その写真の芸術性の高さが

大きな話題となっていた。乾板の中には娼婦の顔の部分が釘のようなもので傷つけられていたり、少女娼婦らしき姿が映ったネガも混ざったりしていて、これが、当時出版された娼婦たちのインタビューをまとめた本



『ストーリービル』(写真上の右=アル・ローズ著)の生々しい当

時の红灯街の描写と合わせて監督の創作意欲を掻き立てたのである。少女娼婦には当時12歳だったブルック・シールズが出演し、一躍スターとなった。



これらHUB新浦安店での例会は、会報50号の山口義憲編集長の健筆で詳しく再現されている。左の写真の女性はボブのパートナーで、彼の最期も看取ったダイアンさん

ジェリーは20世紀初頭当時プロフェッサーと呼ばれ、娼館でピアノを演奏していた。そんな史実にピッタリの音楽家ボブ・グリーンをジャズ通だったルイ・マル監督が選んだわけだ。

その後、ボブは何度も日本を訪れ、1982年第2回サッチモ祭に客演、2006年11月6日には日本ルイ・アームストロング協会の例会でHUB新浦安店にボブをゲストに迎えたのも懐かしい思い出(写真上)。

ニューオリンズに楽器を送る私たちの活動をボブは大変喜んでくれていて、ニューオリンズのハリケーン被害、そして東日本大震災のあと、被災地の子供たちのジャズ交流の夢を彼に伝えると、日本のアメリカ大使館に知人がいるので、是非連絡を取ってみようにと、忠告してくれた。大使館のバーリット・セービンさん(メディア分析官・翻訳部主任)は、ボブの友人でジャズファン、なんと、ボブを迎えた日本ルイ・アームストロング協会の例会に出席されていた。こうしてセービンさんを通じて



左から外山夫妻とルース駐日アメリカ大使(当時)とセービンさん=2012年6月8日、米大使公邸で

ルース大使にお会いすることもでき、TOMODACHIイニシアチブ交流、また国際交流基金からの支援の輪が広がる大きなきっかけとなった。



ボブとプリザーベーション・ホールで。左からアール・ハンフリー、フランク・デマン(tb)、オレンジ・ケリン(cl)、外山喜雄・恵子さん、シルベスタ・ハンディー(b)ボブ・グリーン(p)ジョー・ワトキンス(ds)=1969年

今年5月、ボブから突然ジェリー・ロール・バンドの編曲譜面の手書きオリジナルを返したいと連絡があり、40年ぶりに懐かしい譜面が送られてきた。実は、1年ほど前に肺がんが見つかり、余命半年から1

年と、つけられていたのだ。ボブは、私たちには、そのことは一言も言わなかった。そして、今年8月6日、サッチモツアーでニューヨークに行き、ビンス・ジオルダーノの1920年代スタイルのバンドと共演するとメールをしたら、ボブは体調が悪かった中、2、3時間かけて友人に運転してもらい、私に会いに来てくれた(写真下)。前もって、何度も何度も6日のニューヨークは確かだね、本当だね、6日だね、そこまで行くのは大変だから…絶対6日だねと、くどいほど念を押して年のせいかなと思っていた。その日、彼はちょっと沈みがちで、普通のボブとちよつとちがうなと思った。



50年の彼との友情が、巡り巡ってもたらしてくれた日本とニューオリンズの友好。ボブがいなかったら、大震災被災地の東北とハリケーンの被災地ニューオリンズの子供たちとの交流は実現しなかったと思う。不思議な縁に感謝するとともに、ボブが天国でジェリーやサッチモと演奏しながら、皆で子供たちの笑顔を見て喜んでいる姿が見えるような気がしている。

いま思うと、最後のお別れとお礼に来てくれたのだと思う。彼は最後まで病気とは一切言わなかった。

最  
こ  
な

——第33回記念！今年も華やかに開催しました——

## 「サッチモ祭」(TOKYO NEW ORLEANS JAZZ FESTIVAL)

お馴染みのバンドは健在！新たに参加のヤングバンドも大熱演

涼やかにカラリと晴れ渡り、爽やかな秋の日ざしに恵まれた9月29日(日)、秋の開催に移って2回目の「第33回サッチモ祭」(TOKYO NEW ORLEANS JAZZ FESTIVAL)が、

例年通り東京・恵比寿ガーデンプレイスのサッポロビール(株)「エビスビール記念館」で開催された。一時、今年の開催が危ぶまれてはいたが、サッポロビールはもとより、駐日アメリカ大使館の後援など関係各方面のご努力で今回もつつがなく実施！

例年同様、大いなる盛り上げをみせた。特に今年は、若いミュージシャン中心の新参加バンドも加わり、“デキシー健在”をアピール、サッチモ祭に新しいページを加えた。外山喜雄・恵子夫妻も、常連の年輩ファンもお元気。まだまだいきまっせー！

(小泉良夫)

### 新入生が目白押しの早稲田ニューオリ 女子も多数！50人が応援に駆けつける

若いミュージシャンといえば例年、サッチモ祭を陰で支えてくれている早稲田大学ニューオーリンズジャズクラブ(以下早稲田ニューオリ)。今年は例年以上に新入生の入部があったそうで、この日午前9時半の会場設営集合時間には、そのフレッシュマンを中心に50人を超えるメンバーが集まった。お陰でスタッフに着てもらおう黄色いTシャツは品切れ、在庫ゼロ。女子



が圧倒的に多かったというのも嬉しい限り！前夜の会場設営についてこの朝、プログラムに会報やらアンケート

用紙、チラシなどの挟み込み、入り口での配布もスムーズに進められた。ありがとう！この集合時間より前に、すでに9時前から女性客が1人、入り口に一番乗りというのにも驚かされた。

午前11時の開場と同時にステージ前の“特等席”が埋まってしまったのは例年通り。会場後、開演前までステージ横のプロジェクターには、ニューオーリンズのWWLテレビ局の人気キャスターで、昨年来日し、しっかりと被災地取材してくれた、エリック・ポールセンさんが日本レイ・アームストロング協会(ワンダフルワールド・ジャズ・ファンデーション=WJF)の活動を30分近くにわたって解説、放映してくれた特集番組だ。

### 日米の被災地支援パレードで開幕 恵子さんら司会トリオは今年も健在

正午開演。日米被災地支援のパレードが会場を回り「セカンドライン」で幕を開ける(写真上中央)。例年通り司会は、山口義憲(WJF 会報「ワンダフルワールド通信」編集長)、飯塚さち子、外山恵子のMCトリオ(同上)は健在。演奏の1番手は若さ溢れる早稲田ニューオリ(同上の下段)。毎年メンバーが入れ替わって若返っていくのが早稲田ニューオリの見所、聴き所。次いで例年お馴染みの「ナッチェス・ジャズバンド」、浅草のHUBに出演するなど活発に活動中。





明治大学軽音楽クラブのメンバーを中心に結成されたOBバンド「ジャミング・ホットセブン」は今回嬉しい初登場。早稲田ニューオリ出身OB中心の「ドランカーズ」(前頁の写真下)。トランペットの皆川晴樹さんは、ご夫婦で「サッチモの旅」にも参加していただいたことがあり、会場で“同窓生”との交歓も…。お孫さんも生まれたんですって。ピアノの大野かおりさんは和服で好演。そして、1部の締めは「ザ・サーフサイド・ストンプ」。慶応義塾大学デキシーランド・ジャズ・クラブと湘南のミュージシャンによる粋なバンド。休憩時間には、2回目の支援パレードが会場を巡回する。

**例年支えてくれたあの顔この顔…  
新登場の若いパワーも炸裂した！**

第2部は「ドクター・デキシーセインツ」で幕開け。東京医科歯科大学のまさにドクター中心。すっかりおなじみのメンバーが顔をそろえる。斑尾、新宿、台湾…ジャズフェスを駆け回っているそうです。ついで工学院大学中心メンバーの「デキシー・ダンディーズ」。今年がバンド結成50年というのは凄い！ 次ぎの「ニューオリンズ・ノーティーズ」(写真下の左上)もお馴染みで、何とこちらも来年結成50周年を迎えるそうだ。トロンボーンの横田昭夫さんは、早稲田ニューオリ出身でいつもWJFの会計監査を無償でやって下さっているオーナー税理士。ステージの横では、東京、横浜を中心にスイングジャズダンス楽しんでいるというグループ数組が、バンド演奏に合わせて軽快にステップを踏む。男性一人が両手に女性をそれぞれともなつての華麗なダンスもお見事だった。

次の「ハロバンド」(写真左上の中央)は初出演の若手バンド。浅草ジャズコンテストで銀賞を受賞したとびっきりフレッ

シュなバンド。おなじみの「セカンドライナーズ」がこれに続き、2部の支援パレードに入る。

3部は「バンジョー・ストンパーズ」(同下の上段)。バンジョー



ー9人、それにウォッシュボードと子ども可愛い女の子が笠を持って



加わってくれたのが、とても印象的(同左下)だった。毎年お馴染みの「ハightタイム・ローラーズ」が続き、そして「大丸リユニオン・ジャズメン」。このバンドのコレネット奏者、肥後崎英二さん(同下の下

段)なしには、この「サッチモ祭」なんて実現できませんでした。まさに初回、東京駅・大丸デパート屋上ビアガーデンでの開催、生みの親。難病を克服して今年も大熱演でした。そして「古川奈都子ソウルフード・カフェ」。ニューオリ



ンズで活躍している古川



んはもとより、トランペットの中村好江さん(同左の下段)



のパフォーマンスは、この日のハ

イライトのひとつで

もありました。サッチモ祭に若いパワーが炸裂するのは大歓迎、また来年が楽しみです。「デキシー・ショーケース」

(前頁の右上段)は、大ベテランの下間哲さん(tp)の熱演が光り。それに6人組のコーラスグループ Shoofies(同右中央)がハモって、演奏にステキな花を添える。

## セインツやら会場を悩殺した美女集団 水森亜土とローズマリー・ダンサーズ

しんがりはもちろん「外山喜雄とデキシーセインツ」(写真下)。演奏に先立ってこの会場を提供して下さっているここ、

エビスビール記念館の嶋田一夫館長(同下)がステージで挨拶。33回目

の開催を祝福してくれて、こんな素晴らしいエールを送ってくれました。「エビスビールとジャズはとてもよく似ています。それは人を笑顔にしてく

れることです」と。そう、みんなエビス顔でしたよ。「サッポロのサッチモ」はしっかり守られていました。ステージ脇のテイステイングサロンでは、各種エビスビールを求めて、正午の開演早々から行列ができるほどの賑わいだった。

セインツの演奏には、超美女ダンサー3人を加えた「水森亜土&ローズマリー・ダンサーズ」(写真2段目)が加わった。それも大胆に美脚を“大展開”したものですから、最前列にいなくても口をあめぐり…いやはや、そのセクシーさと魅力をたっぷり堪能さ

せていただきました。

セインツは、「ウエストエンド・ブルース」で聴かせ、サッチモのスカット誕生秘話「ヒービー・ジービーズ」で笑いを誘う。締めは「聖者の行進」。アンコールに呼んで「この素晴らしき世界」。正午開演、8時終演…延々8時間。今年も例年以上に素晴らしいサッチモ祭だった。

「スイング・ジャーナル」誌を引き継いだ「Jazz JAPAN」

誌が、外山喜雄さんの特別寄稿『我が心のルイ・アームストロング』などを特集した“アーリー・ジャズを聴こう”の第38号を会場で販売したが、持ち込まれていた30部は(当然のことながら)終演までに完売。デキシーの根強い人気を目の当たりにさせた。

ここ「エビスビ

ール記念館」での開催に尽力して下さいました岩間辰志さん(元サッポロビール社長)の言葉ではないが、早稲田ニューオリの若い力が、今年も引き継がれ、また将来に向かって受け継がれていくように、アーリー・ジャズもまた若い力に受け継がれて行くに違いない。

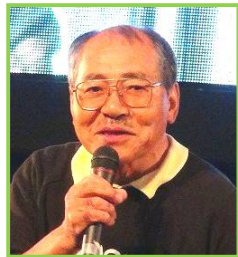
この日、会場を3回にわたってパレードした支援パレード(写真左)と募金箱へのご寄付の総額は、22万2638円！ 来年もまた開催できるよう、みなさま、引き続きご支援ください。

主催：日本ルイ・アームストロング協会  
協賛：エビスビール記念館  
(有)ノラミュージック  
後援：アメリカ大使館  
協力：サッポロビール株式会社  
ポッカサッポロフード&ビバレッジ株式会社



記念すべき40周年を迎えた ジャズの街うつのみや「MIYA JAZZ INN」  
**地元バンド「スウィングハード・オーケストラ」は創立45周年！**  
 リーダーでWJFに毎年寄付金を送って下さっている吉原郷之典さんに聴く

来らっせー！ “ジャズの街うつのみや”で知られる栃木県宇都宮市。ここで毎年秋に開催されている『MIYA JAZZ INN(ミヤ・ジャズイン)』が今年も、記念すべき40周年を迎えた。外山喜雄とデキシーセイNZは今年も招待されてメインステージで演奏した。ジャズと餃子、それにカクテルの街…そんな魅力に誘われて久しぶりに宇都宮へ。ここで温かく迎えてくれたのが吉原郷之典さん(うつのみやジャズのまち委員会々長(写真)。そう吉原さんは「サッチモの旅」の“同窓生”でもあり、吉原さんがリーダーの地元ジャズバンド「スウィングハード・オーケストラ」は、各地の演奏会で集めた義援金を毎年のようにWJFに寄付してくれている。そのバンドも今年、創立45周年を迎えた。この機会に吉原さんにいろいろお話を伺った。



(小泉良夫)



別世なれば、ルイはまた、トランペットと5人のメンバーを率い、アルプスを越えた

選んだ米CBSテレビのドキュメンタリー番組『サッチモは世界を廻る』(原題=Satchmo the Great)。外山夫妻の肝いりで古いモノクロの映像を鮮明にデジタル化し、英語のナレーションも

翻訳して日本語の字幕まで入れたもの。今年4月30日に開催されたWJF例会『外山夫妻の大臣表彰記念とユネスコ国際ジャズ・デー参加コンサート』でも、短縮版(35分)が上映されている。



その際、吉原さんは、外山さんの宇都宮時代の同級生、藤原宏史さん(ミヤ・ジャズイン推進協議会委員、前

宇都宮市教育委員長=写真左上)らとともに上京、この映画を見てすっかり惚れ込んでしまった。今回は全1時間超に及ぶフル・バージョンの初上映。その公開に吉原さんともども大変な力添えをしてくれた。

会報77号でもご紹介したが、こんな内容——。

1956年9月末、ルイ・アームストロングとオールスターズは、スイス、ドイツ、ベルギー、スウェーデン、フランス、イタリア、そして、はじめてのスペインも入れて、10カ国を廻る3ヵ月間のヨーロッパ・ツアーに出発した。ヒコーキの中のルイとバンドが映し出される(写真上)。そして「西暦紀元前218年、ハンニバル(地中海に面した古代国家、カルタゴの将軍)は37頭の象と12,000頭の騎馬を率いてアルプスを越えた。ルイ・アームストロングは20世紀半ば、トランペットを抱え、5人の演奏家を率いて同じアルプスを越えたのである」…CBSのニュースキャスター、エドワード・R・マローの壮大な語りのイントロで始まる。『南部の夕暮れ』がバックに流れる。

サッチモはまた、1956年5月、曾祖父母の出生地と信じているガーナにも回った。空港で盛大な歓迎を受け、当時のエンクルマ首相の前でも演奏する。ガーナでのコンサートには、10万人もの聴衆が押し寄せたという。ガーナの学校でサッチモが子供たちに話しかけ、トランペットをプレゼントするシーン。このシーンこそ夫妻の脳裏に強く焼き付けられ、WJFの活動の出発点ともなっているシーンなのだ。

**ブルースの父も涙の「セント・ルイス・ブルース」あのバーンスタイン指揮のオーケストラと共演**

映画の最後にサッチモのもう一つの夢、ニューヨークのルイゾーン・スタジアムで行われた有名なグーゲンハイム・コンサートで、若きレナード・バーンスタインが指揮するニューヨーク・フィルハーモニックの88人とともに、『セント・ルイス・ブルース』を演奏した映像が紹介される。

**涙を誘った感動の映画『サッチモ・ザ・グレイト』今回は全1時間超のフルバージョンで初公開**

「“ジャズの街うつのみや”ですから市民のみなさんに、もっと身近にジャズに親しんでいただき、ジャズの素晴らしさを知っていただくと考えていたのです。そこで今年はジャズイン(11月2～3日)の“前夜祭”といった感じで1日夕刻、外山夫妻をお招きして、映画『サッチモ・ザ・グレイ



うつのみや親善大使のお嬢さんたちを先頭に柿沼賢さん(ミヤ・ジャズ推進協議会会長、ミヤ・ジャズイン実行委員長=写真上の右端)、セイNZもパレードに参加

ト』と講演『音楽(ジャズ)の持つチカラ』を開催させていただきました。いやあ、これは感動的でしたねえ」と吉原さん。会場は宇都宮市民プラザの多目的ホール。60人ほどのお客さんがあった。

この映画は、外山さんのジャズ映像コレクションの中から

2万5千人の聴衆の中には、83歳で盲目となっていたこの曲の作曲者で“ブルースの父”、W・C(ウィリアム・クリストファー)・ハンディの姿があった。演奏を聴き、涙ぐむハンディ…(写真右の上段)。バーンスタインは聴衆に向かって、こう語りかけた。「私たちが演奏する『セント・ルイス・ブルース』は、彼の演奏をまねてやったものに過ぎません。彼の演奏こそ、真実に満ち、誠実でシンプルなもので、気高ささえあると思います。彼がトランペットを唇に当てた時、たとえ練習のためであっても、そこに魂が打込まれているのです。



彼こそ音楽にすべてを捧げた人物であり、私たちこそ、共演できたことを光栄に思っているのです」と(写真上の下段)。まさに「音楽大使」としてのサッチモの姿を追った迫真のドキュメンタリー。

東西冷戦の時代、ヨーロッパ各地、鉄のカーテンの向こうでも大喝采を受けるサッチモ・オールスターズに感銘を受けたNYタイムズ記者が、「アメリカの持つ秘密兵器はマイナー・キー中のブルーノートだ！」と打電し、紙面を飾った。

「でも、1時間もみなさんに見ていただけるのか、始めはちょっと心配していたのですが、なんか涙ぐんで見て下さっているお客さまもいらしたんですよ」と恵子さん。

「そう、私も感動して目をウルウルさせているときに、外山さんにステージに呼ばれましてね。いやあ参りました」と吉原さん。「こんなジャズの原点を世界中の人たちに見ていただきたいですね。“ジャズの故郷”ニューオリンズでも、このようなシーンは若い人たちも知らないはずですよ」と外山さん。まずは“ジャズの街うつつのみや”を席卷した。

### 2005年「サッチモの旅」以来の強い絆が…心の故郷へ「宇都宮のファンと再訪したい」

吉原さんと私たちWJFの接点は2005年、ハリケーン・カトリーナがニューオリンズに大被害をもたらした直前の「サッチモの旅」。吉原さんはご夫婦で参加。確かファンタイム・ビッグバンドの笠原克信さん(バス・トロンボーン)もご夫妻で参加。このハイタイム・ビッグバンドもずいぶんとWJF

に寄付を届けていただいている。毎年のようにWJFクリスマスパーティーで“サッチモの金太郎飴”をプレゼントして下さっている水越有造さんはお嬢さんと一緒に参加。WJF事務局の細川ハテミさんもいらした。うちも夫婦で…。そのさいG・W・カーバー高校を訪問して楽器を寄贈した。ハリケーンで壊滅した同校の音楽ディレクターだったのがウィルバート・ローリンズ先生。フジテレビのワシントン支局長がクルーとともに現地取材に見えた。ザ・タイムズ・ペキューン紙のシーラ・ストロウプさんも素晴

らしい記事を書いてくれた。同校卒業生でTBCプラスバンドのショーン君も、当時まだティーンエイジャーで元気な姿を見せていた。思い出いっぱい“心の故郷”の旅だった

だけに、みなさん、その後も強い絆で結ばれている。

「この前、テレビでニューオリンズのこと紹介されていましたでしょう。あの番組を見ていたら、そこに



路面電車が出てきて、ああ、また行きたいなあって…。今度は“ジャズの街うつつのみや”のみなさんとも一緒にいって、“ジャズの故郷”ニューオリンズ見ていただけたらいいのに…などと考えているんですよ」と吉原さん。



### メインステージでセンツ演奏、観客を魅了 吉原さんは司会、挨拶、演奏…終日大忙し

翌2日午前11時前、二荒神社前のPARCO横からセンツも加わったパレードがメインステージのオリオンスクエアへ向けて出発し、ミヤ・ジャズインの開幕を高らかに告げる(前ページの写真)。

正午過ぎからここでセンツが出演。お客さんを巻き込んで！の定番の曲に加え、久々に恵子さんのピアノをフィーチャーした「ケイコズ・ブギー」を聴かせる(写真上)。この日のトリは、吉原さん率いる「スウィングングハード・オーケストラ」と地元出身の超ベテラン・ヴァイブ奏者の内田晃一トリオ+ヴォーカル。内田さんは、やはり地元出身の世界のナベサダこと、渡辺貞夫さんの大先輩でもあるとか。

吉原さんの言葉を借りると、45周年を迎えたスウィングハード  
ハードみなさんともども「お・も・て・な・し」ではなくて、「お・  
と・し・よ・り」とか。会場の爆笑を誘う。吉原さんはまだ30代  
だった？「始めはコンボバンドとか、ビッグバンドが別々に  
コンサートを開いて



熱演する「スウィングハード・オーケストラ」。トロンボーンの中央が吉原さん

いたんですが、みんな一緒にやれたらいいなあ…と思って  
始めたのが、このミヤ・ジャズインなんです」と。今年は、5  
会場に70団体、参加者は600人にも上ったそうだ。

外山さんも、こ  
こ宇都宮市で幼  
稚園、小学校、中  
学校を過ごしてい  
て以前、母校の  
戸祭小学校で「ジ  
ャズの出前ライ  
ブ」をやったことが



ヴァイヴの大ベテランの内田晃一トリオ

ある。もう一つジャズと深い関係があり、今や日本一の老  
舗ジャズスポットとなった「近代人」がある。ナベサダ・クラ

ブの会長も務めるマ  
スターの平山正喜さ  
ん。この方もステー  
ジで吉原さんから紹  
介されていた。会場  
では「ジャズのまち



ステージで「近代人」のマスター、平山正喜さんをインタビューする吉原さん

宇都宮展」も出され、  
平山さんもしっかり紹  
介されていた。宇都宮  
市は「餃子日本一」も  
奪還したそうだし、ジャ  
ズでも日本一に名乗り  
を上げなくては…。“ジ  
ャズの街うつのみや”

——みなさんも吉原さんを応援してあげてくださいね。吉  
原さんのバンドコンサートでのご寄附、今年も12万7472  
円をご寄附いただきました！！感謝！

## 外山恵子さん、初のリーダー・アルバム セインツ全員がバックアップしてレコーディング

初めてだったんですね。外山恵子さん(p, bj)初の  
CDリーダー・アルバム **Keiko's New Orleans  
Spirit 『世界は日の出を待っている』**(ノラ・ミュージッ  
ク)のレコーディングが11月24, 25の両日、東京・中央  
区の「音響ハウス」8Fスタジオで繰り広げられた。共演



はもちろん、外山  
喜雄率  
いるデキ  
シーセ  
インツ。そ  
う、あの  
「銀座ジ  
ャズひな  
祭り」を  
思い起  
こさせる  
シーンで  
した。

トラン  
ペット、ク  
ラリネット×2、トロンボーンはスタジオの中央、恵子さん  
とリズム楽器は、それぞれ防音・密封された部屋でのレ  
コーディングとなった。

そんな現場を覗かせていただいたが、ド素人がうろう  
ろするような所ではなく、張り詰めたシビアな空気に包ま

れ、私は、そうそうにしっぽを巻いて失礼した。

この2日間、レコーディングは午後4時から同11時に  
及んだという。「もう私、腰が痛くなってしまいました」と恵  
子リーダーは述懐する。



取り上げられ  
た曲は、もち  
ろん恵子さ  
んのこれま  
でもじっくり  
暖められ、ニ  
ューオリンズ  
に思いを馳  
せた曲ば

かり。おなじみのジョージ・ルイス  
の『リード・ミー・セイビアー』では、  
クラリネットが2本加わり、今まで聴  
かれたことのないような幻想的な  
世界を紡ぎ出している。

なかでも、特筆されるのが恵子  
さんのバンジョーのかつての持ち  
主だったローレンス・マレロに捧げ  
たもの。それに、バンジョー(タイト  
ル曲ともなった『世界は日の出を  
待っている』)はもとより、ピアノ  
([『ハイ・ソサイエティー・カリプソ』



『バイバイ・ブルース』)も聴かせます。

「ニューオリンズに思いを込めて…私の好きな曲は、  
これなのですよって感じですね」と恵子さん。恵子ファン  
を納得させる演奏が続いたことでしょう。今年中には、リ  
リースされる予定ですので、皆さまお楽しみに。

(小泉良夫)

楽器のご寄付です

ありがとうございます

- ◆トランペット 辰口 悦三様 (松戸市)
- ◆トランペット 山田 真一様 (福井県)

いろいろありました2013年

夢のようだった1年を振り返って

—外山喜雄



こんなこともありました。今年5月17日、WJF理事会とスタッフのみなさんの慰労もかねて浅草おかみさん会理事長、富永照子さん(恵子さんの左)のおそば屋さん「十和田」で懇親会を持つことになりました。驚いたことにこの日は浅草・三社祭の宵宮だったのです。我々がお店に到着したときは、お店の前を次々と御輿が練って行き、どこも浅草は見物客でびっしり！おまけに富永さんのご配慮で浅草の振袖さんまで来てくれたんです。さっそくパチリ！富永さんはニューオリンズの名誉市民でもあり、奇しくも中央に名誉市民3人勢揃い！

先月、NYサッチモ・ハウス館長、マイケル・コグスウェル氏から、ハウスが年に一度、12月に開催している大晩餐会GALAの委員になってほしいと連絡を受けました。あまりお力にはなれないかもしれないが、大変光栄なことでお引き受けさせていただきました。今年のGALAは名アレンジャー／音楽プロデューサー、クインシー・ジョーンズ氏と、ジャズ評論家で元ダウンビート誌編集長、ラトガーズ大学ジャズ資料室のダン・モーガンストーン氏他2名が特別表彰を受けた(15ページに関連記事)。

日本ルイ・アームストロング協会が発足して、お蔭様で来年20年！“銃に代えて楽器を”、そして“サッチモの孫たちに楽器を”のかけ声で楽器を送りつけ800本。毎年サッチモ心の旅をつづけ、サッチモ祭や例会を開催、サッチモ・ハウスに寄付を送り開館を支援し、ニューオリンズのハリケーン被害を支援し、ハリケーン被災したニューオリンズの少年たちの訪日を実現させ、今年夏のスウィング・ドルフィンズの渡米と嬉しい出来事が続いている。今年夏、ニューオリンズの新聞が、サッチモ・サマーフェストのハイライトはTOYAMAだ!と書いてくれたことも忘れられない。

それは、まるで運命の赤い糸が不思議に結ばれ、天国からサッチモが“サッチモの天使”を派遣して助けてくれているかのよう。永年応援していただいている皆様もちろん“サッチモの天使”の仲間入り！！初めてのニューオリンズから45年の縁(えにし)が絡み合い素敵な日米のジャズ交流が育っていることを、皆様と共に喜びたいと思います。ジャズとサッチモを愛する皆様のお気持ちに背中を押していただいて、色々な夢がさらに大きく花開いた2013年、そして日本ルイ・アームストロング協会の20年間です！ありがとうございます！！

そしてもう一つ、長年共に活動を進めてきた外山恵子…〇〇歳にしてバンジョー&ピアノのファースト・リーダー・アルバムが完成しました！題して **Keiko's New Orleans Spirit 『世界は日の出を待っている』**(13ページ)。

これからも“元気でスウィング”し続けます。皆様に心から感謝申し上げます。

**募集中!**

♪ジャズを愛する皆様

どうか会員になって下さい！！

また皆様のお知り合いの方々に  
ぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

—WJF年会費—

- 一般会員(General Membership) ¥6,000
- 学生会員(Student Membership) ¥3,000
- 賛助会員(Friends of Louis Armstrong) ¥12,000

■会費のお振込み先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京UFJ銀行浦安駅前支店

普通：5175119“ワンダフルワールド”

お問い合わせは：WJF事務局

TEL：047-351-4464

Fax：047-355-1004

Email:saints@js9.so-net.ne.jp

日本ルイ・アームストロング協会HP

検索エンジン：Yahoo,Googleで

ルイ・アームストロング

巻頭は外山夫妻の英国センチメンタル・ジャーニー記事です。夫妻のジャズ源流は早大ニューオリンズ・ジャズ・クラブから始まり、ニューオリンズ武者修行時代を経て、マーチン楽団との欧州・米国ツアーへの参加、その後ふたりのジャズ水脈は脈々と流れて大河となつていきます。小泉さんのインタビュー記事は、夫妻のジャズへの情熱と青春の行動を伝えています。ジャズ映画の蒐集も英国での出会いからというエピソードも、11ページの『サッチモは世界を廻る』のフルバージョン・日本語字幕入りにつながってくるのですね。▼ポブ・グリーンさんへの追悼文(6ページ)も外山夫妻との交流が温かく描かれ、WJFの例会でのエピソードも昨日のことのように思い出されます。▼第33回サッチモ祭レポート、10ページの水森亜土&ローズマリ・ダンサーズの写真は本通信では稀有なセクシーショットであります。▼外山恵子さんの初リーダーアルバム『世界は日の出を待っている』楽しみですね(13ページ)▼よいお年をお迎えください。(山)

編集長から